外国語部の自由さ

野　島　利　彰

2005 年 3 月を以て外国語部は 30 数年の歴史を閉じ、新組織「総合教育研究部」に移行する。「外国語部創設 20 周年記念号」である『論集』35 号(1992 年 3 月刊)を読むと諸先輩たちの外国語部に寄せる熱き思いが伝わり、外国語部の存在が永遠に続くかのような錯覚に捕らえられる。しかし文学部から分離独立して新しい生を生きたということはその終わりもまた覚悟すべきだったのかもしれない。いや、そんなに悲観的に考えることはない。新組織への移行は新しい出会いの場であり、そこには外国語内部にはなかった研究分野との接触がある。そこには当然新しい混沌があり、その混沌から再び新しい生が生まれてくるであろう。外国語部が新組織に寄与するとすれば、それは自由さであると私は思う。

私は 1975 年に駒澤大学のドイツ語教員に採用され、まだ誕生してまもない外国語部の一員となった。他大学のことは、いくつか非常勤講師をして垣間見た程度で、その事情には疎いが、私には駒澤大学外国語部の組織に非常な自由を感じた。「自由を感じた」ばかりでなく、私はこの自由を生き、この自由のお陰で現在の私があると言っても良いと思う。

採用されたころ私はドイツ文学ではなく語学を専門としていた。といっても言語理論ではなく、私たちがドイツ語を理解するうえで役に立つ事柄、例えば過去形はどのような場面で使われるのか、代名詞の敬称と親称はどのような使い分けがあるのかなど、いわば日本人から見たドイツ文法であった。

それ以前に私は自分が樹木に興味があることを発見していた。二度目の大学卒業のころ、一人旅で東北地方を歩いていた。毛越寺のユースホステルで私は京都府立大林学科の、やはり卒業まぢかの学生に会い、この世に「林学」なるも

のがあることを初めて教えられた。私は彼と四日ほど一緒に旅をし、雪のちらつく山々を見ながら林学の一端を学んだ。それ以来、私は樹木図鑑をカバンに入れ、樹を見るとその名を探した。

あるときドイツで、語学講習終了後、ドイツ人の友人一家が私を山に連れて行ってくれた。山小屋に着くと私はすぐに森へ飛び出した。ドイツの森を身近に見られた感激で、私は樹々に触れながら先へ先へと方向も定めずに歩いた。気がつくと私は山小屋への帰り道を見失っていた。「迷った」と恐怖した瞬間に私はドイツの森と日本の森の違いを知った。ドイツの森には下草がなく自由に歩ける。そのため踏み跡が見つかりにくく、道に迷いやすい。「Wald」は必ずしも「森」と翻訳できない。ではドイツの森にはどんな違いが、またそこから生ずるイメージの違いがあるのか、それが私の関心事となった。

1984 年私は駒澤大学の在外研究員としてドイツに派遣されることになった。文学関係は初めから除外したが、ドイツ語学を専攻している以上、そのような分野の研究所を選ぶべきかと悩んでいた。しかし私にはすでに森のほうが重要であった。私はたまたま『ドイツ慣用句事典』の中で狩猟用語の例を見つけ、それを基に在外研究申請書類の研究目的欄に「ドイツ語と狩猟用語の関連性の研究」とし、かなり強引な理由書を作り上げ、研究機関をミュンヘン大学林学部付属林業史研究所とした。林業のなかに狩猟も含まれるとはいえ、私の専門と研究機関があまりにもかけ離れ、語学研究目的で林学の研究所に行くのは如何にも奇妙なので、私はこの書類が教授会でクレームが付くのではないかとかなり心配していた。しかしあっけなく審査に通った。そのとき私は「外国語部は自由だ」と思った。

私がそのままミュンヘン大学の研究所で樹木学や林業史を学ぶことができたのは、まさにこの外国語部の自由のお陰であった。研究所滞在中に林学をきっかけに、私の目の前に森林枯死問題や狩猟学などつぎつぎに興味ある新しい世界が開かれ、私は外国語部の自由を十二分に堪能させてもらった。私がその後、夏期休暇中にフィレンツェの語学学校でイタリア語を学ぶという自由な発想を得たのも、外国語部の自由のお陰であった。外国語部はこのような自由の上に

あった。

新組織「総合教育研究部」は教養教育の充実を目的として設置された。教養教育すなわち自由なる教養人の育成にはまず教育組織そのものが自由であることが必要であろう。外国語部が有していた自由はこの点で大いに寄与できるはずである。もちろん自由が放縦に堕さないことが前提であるが。

紙魚のたわごと

岸　本　茂　和

今年度をもって外国語部がなくなり来年度から総合教育研究部というふしぎな名称のファカルティーの一部門になる、そうなればおのずから外国語部論集もこれが最終号、思い出のなにかを、それもありとすればのはなしだが、書けという。

なぜかしらちかごろわたくしはどうにも憂鬱だ。高度科学技術の進歩に心身ともについてゆけないことがそのおおきな要因らしい。

そもそもコンピュータがわからない。わかろうとするのが土台身のほどしらずの高のぞみ、わからないながら、それでもワードはけっこう動いている。

インターネットがわからない。わからないながら、しかし、大抵のことなら検索ぐらいどうにかやっている。エクセルはだめだがつかう機会がないのだからだめでも一向に平気だ。数あるソフトのなかでせめて名前ていどでも知っているのはこれくらい。

むかしの LL 教場でも四苦八苦したのに、ちかごろでは e-learning ということばもあるらしいが、情報センターの視聴覚教室の操作盤になるともういけない。身がすくみ手がうごかない。なにしろ見たこともないような機械類がならんでいるのだから無理もないとみずからあきらめ顔だ。

ところで、数年まえ、情報科学技術をもっぱら教える大学を見学する機会があったが、おぞけをふるうようなすごい装置がずらーッとならんでいた。こうなるとますますいけない。自動車が運転できるだけでもソンケイの対象なのに、コンピュータが自在に駆使できたらなんと形容したらいいだろう。

こうなれば電子計算機といった時代がいっそかえってなつかしい。そのころ電子計算機――そうだ電算機といったこともあった――といえば、素人には無縁の、あってなきがごとき存在、目の血走ったどこかの専門家がいじくっている、得体のしれない怪物のような装置、そんなイメージがあったようにおもう。敬して遠ざけ敬して遠ざかるもの、それがわたくしにとっての電子計算機だった。

それでもどの時代にも道によってとうといひとはつねにいるもの、四十年いじょうも前すでに、京都の大学で電子計算機をつかいこなし、ブンガクしか関心のない門外漢に、その歴史や初歩ををねっしんに説明してくれた高校の同級生もいたのである。二進法なることばをきいたのもそのときがはじめてで、指は十本、箸は二本だけではどうやら、ことはすみそうにない時代のとば口にさしかかっていたようだ。

ちょうど三十年前、わたくしがそのファカルティーの一員になったとき、外国語部は文学部から離れてまだ五、六年、みな若くて元気横溢、おもえば経済学部とならんで学内における若さの源泉のような教員団だった。

その外国語部がなくなるという。電子計算機がコンピュータに、カセットテープが CD に、ビデオテープが DVD に、写真機がデジカメに化するなか、ソニーが東京通信機工業と呼ばれていた時代の、あの持ち重りのするテープレコーダーで英語音声学をまなんだものにとって、まさに桑田変じて滄海のたとえ、身のおきどころをもとめてウロウロ、オロオロしつづけなければならないようだ。

そんな時代、書かれた文字や印刷された文章にしか関心のうすいグーテンベルクの末裔にとって、とうとうたるデジタル化の世界を生き残ろうなぞとあらぬのぞみを抱いてはいけないのだ。旧時代の英語教師にあまんじながら、第二言語としてまなぶ英語の基本は五文型、学問に捷径はなく、いい文章にしたし

むにしくはありません、などとたわごとをぶつくさいいながら、衰老の数年をなお教壇に立てるかいなか自問しているところだ。

最終号に寄せて

石　原　孝　哉

外国語部紀要・論集が、この名称での最終号となる。外国語部が、平成 18 年 4 月から、新組織である総合教育研究部に移行するとともに、名称も変更されるためである。

外国語部紀要は、昭和 46 年の外国語部発足と同時に第 1 号を発行して以来、年一回のペースで発行を続け、64 号に至っている。一口に 64 号というが、この間外国語部の研究業績の最も重要な発表場所であったという重みを感じずにはいられない。昭和 46 年というのは、私が北海道教養部から東京に移籍した年でもあり、私自身の駒澤大学における歩みとも重なるために、感慨もひとしおである。

一方、外国語部論集は昭和 47 年に第 1 号が発行された。教授会で、まず問題になったのは名称をいかにするかということだった。論集、論叢、そのほか、ギリシャ語やラテン語を含めていくつかの候補があったが、結局、最も常識的な論集という名称におさまったという経緯がある。論文ばかりでなく、翻訳、創作、書評など、幅広い分野を取り込んでいこうというのが当初の趣旨であった。紀要が専任教員だけであったのに対して、論集には非常勤講師の投稿も認めることにした。この方針は、民主的だということで、非常勤の先生方にははなはだ評判がよかった。当時は、非常勤講師の投稿を認める大学は少なかったのである。とはいえ、非常勤講師の論文は枚数の制限が厳しかったうえ、一定の割合を超えないようにと教務部から絶えず要求されていた。非常勤の投稿者

が多いときには、専任も大勢投稿することが求められ、責任者である紀要委員は無理して投稿することも珍しくなかった。最初のうちは、外国語部の専任教員数も少なかったので、年一回発行の紀要と論集の原稿を集めるのに苦労したこともあったが、やがて投稿者もふえて、論集の発行回数を増やすことになった。

こうして昭和 52 年度には、秋と春の 2 回発行することになった。外国語部が発足してからの最初の 10 年間には、年平均して 26 本ぐらいの論文が発表されているが、その後の 10 年間は年平均して 37 本と、発表論分数が飛躍的に増えているのはこのあたりの事情を反映したものであろう。最近では年平均して 25 本と論文の点数は減少しているが、一本あたりのページ数は着実に増加している。紀要では、一本の論文が 200 ページを超えるものも珍しくはない。これは研究に対する熱意の反映であると同時に、原稿をフロッピー・ディスクで提出するなど、発行経費が大幅に節約できたこともひとつの原因であろう。

論集は 64 号で最終号となるが、名称は変わっても研究業績の発表場所としての役割はますます重要なものとなってゆくことであろう。

外国語部の周辺で

小　玉　齊　夫

私が外国語部でフランス語を教えはじめたのは、前年の十一月半ばに五年ぶりに日本に帰って来て周囲への適合もまだ十分とは言えず、加えてフランスに戻る意図も皆無ではなかったから、右とも左とも決意しがたい、宙ぶらりんで不安定な心理状態の時期、言うならば「猶予の時」に於いてであった。何とはなしの落ち着きの悪さ、その一例を挙げてみれば、今にして思えば赤面ものだが、日本語文の結語部分をどう書いてよいのか、なかなか瞬時には決断がつかず、まるで連綿と続く文の長さのみをいたずらに追求しているかの如くで、おそらく喋る時にも、同様に意味不明な言葉のつながりという類似の症状が現れていたに相違ないのだが、しかし、たとえそうであるとしても、それはそれで今の私には懐かしさと微笑ましさの対象であり、願わくばもう一度再現してみたいとさえ時に思う、慕わしい原感情の流出そのものであった。

その頃の、一時限めの授業の一場面として、H.S という一年生の女子学生の発言が、現在でも私の記憶に残っている。

幼児の頃ならば人並みに働いていた私の記憶力は、おそらくは 6 歳、13 歳および 17 歳の時の出来事等によって、それ以降は既にある程度は意図的な韜晦になってしまったはずであるが、記憶を削除というよりは抑圧しようとする、その働きに、絶えずさらされていたように思われる。気取って言えば、私には過去を「無化」しようとする願いがつねにあった、ということになるが、そういう流れの延長で記述するなら、私が現在記憶にとどめている何かは、私にとっては既にかなり重要な意味を付与されたもの、ということになる(私の場合だけがそうだ、などと言いたいわけでは、勿論ない)。その、昔風に言えば級長タイプの利発そうな女子学生の発言は、いかなる媚びも冷やかしも嘲笑も侮蔑の

意図もなく、ただ純粋な提案として「先生、とても天気が良いので、外で、駒澤公園で、授業をしてくれませんか」というものであった。

現在の私なら、よし、と応えて実現させることも可能であろう。授業の在り様その変化じたいが、授業参加者にとって、純粋に新奇な歓びとして受けとられ得るのであれば。だが、残念なことに、慚愧に堪えないことに、新米の非常勤講師としてまだ二回くらいしか授業を経験していなかった私には、彼女の素晴らしい提言に応ずるだけの余裕が欠けていた。うららかな陽射しがいっぱいに輝いていた駒澤公園であったのに。私は、あえて、私の性格の問題ではない、と思い込もうとしたが、そして事実、単なる心理的な余裕だけの問題ではなかったかもしれないが、私は彼女に事態を正確に親切に説明することすら出来なかった。不意を突かれたという負の側面もあったかもしれない。ともかくも授業を終えた私は自分に対する不快感を払拭できないまま、呆然とバスに乗りこみ虚しく渋谷へと向かっただけであった(当時はまだ地下鉄は通っていなかった)。

この記憶は、折にふれて、私の心のなかでは再現されてきた。冒頭に書いた「不安定感」というのも、自身の不甲斐なさへの弁解としてわざわざ挙げられたフシがあるが、そんな風に意識しつづけていることそれじたい、私がこの記憶を未だに削除・抑圧できていないシルシである。今では H.S さんという名前が冠されたこの記憶は、私にとっても、消滅していく外国語部の周辺に位置することがらのひとつにすぎないが、それでも、それが、外国語部という組織が有していた重要さ「以上」とまでは言わないにしても、少なくとも同等の、しかし同等でありながら異質の、寛容さとか心の暖かさとかにつながるという意味ではより根源的な価値にも繋がり得る、そういう記憶であるということは、せめて今の時点からでも、遅ればせながら、意識しつづけていきたい、と、消え去り行く過去時を偲びながら、私は、思うのである。

外国語部雑感

遠　山　博　雄

外国語部に専任講師として着任したのは 1984 年の 4 月ですから、もう今年で 22 年目になりますが、もちろん部創設の経緯は詳かにしません。部はすでに独自の学内組織として、教育に研究に機能していました。フランス語教室は当時専任 8 名、非常勤の先生方も 30 名程を数え、ずいぶんにぎやかでした。最初におおせつかった仕事が非常勤の先生方と教務部のスタッフを交えてのソフトボール大会の幹事、あいにく高熱を出した直後で、フラフラになって勤めたことを懐しく思い出します。

そんな親睦行事とは裏腹に、教授会は寄附行為改訂、特に学長公選の採否をめぐって緊迫した雰囲気につつまれていて、右も左もわからない新米教員は諸先達の熱い議論を神妙に拝聴していました。とりわけ、公選制支持を決議した教授会の息詰まるような緊張感は忘れることができません。

それでも就職浪人中発表できなかった論文を『紀要』や『論集』に掲載したり、少しずつ仕事を覚えたりしながら、なんとか職場に慣れて、3 年半後には 2 年間の在外研究をいただき、勉強と映画・芝居三昧の生活をして帰国。思えば恵まれた環境に暮らす無邪気な若造でした。

帰国後も教授会内では比較的平坦な日々でしたが、例の大学設置基準の大綱化とそれに伴うカリキュラム改革あたりから状況一変、温度が急上昇しはじめ、こちらもフランス語とフランス語圏の文化や社会についての知識を学生諸君に供する立場から、その内容や伝達方法の反省と改善に取り組むことになりました。そしてその流れの中に身を置き続けていること今にして変わりありません。

しかしその後の部の不幸な歴史については、今振り返って語るというよりは早く忘れたいことの方が圧倒的に多いのは残念至極です。せっかく独立組織と

してさまざまに有利な点を与えられていながら、いつのまにか学生を抱えていない気楽な、一種の無責任体系の中で視野狭窄に陥ってしまい、そこからさまざまな問題が出来してきたように思われてならないのです。

もろもろの委員を歴任のすえ、2003 年 4 月から 2 年間こともあろうに部長を拝命し、部組織を本来の教育・研究目的に向けなおそうと舵取りを試みましたが、どれほどのことができたか、心許ないかぎりです。今般新組織に吸収されていくにあたり、再び原点にたちかえって出直さなければならないでしょう。そのことによってしか、私達は研究者・教員としての使命を果たすことができないのですから。